

「授業公開」の取り組み

米 津 光 治

(教育学部准教授・教育研究所研修部主任)

はじめに

いうまでもなく FD（ファカルティ・ディベロップメント）は、教員の授業内容と授業能力の向上を目指すものである。このことは教員に必要であることは理解していても、決して容易なことではない。私自身、中学校教員としての授業経験はあるものの、大学における学生に対する教え方について、特別の教育を受けたことはない。結局、自分の経験則から私が教えを受けた先生の授業の良いところを取り入れたり、学生の反応を見ながら自分なりの工夫をしているに過ぎない。激しく変化する社会への対応や山積する教育課題の解決を迫られている学生が必要とする教育を提供するためには、個人的な努力には限界があり、個々の教員が他の教員と協力しつつ、授業内容と授業方法を結びつけた授業改善を考える必要があると考える。

今次の授業公開では、以下のように2講座の授業を公開した。

I 「運動技能実習Ⅱ」

1. 実施要領

- ① 日 時 平成 20 年 12 月 2 日（火）3 限
- ② 場 所 体育館（グラウンドコンディション不良のため）
- ③ 対 象 教育学部 3 年生（学部共通）

2. 授業の概要

本講座は、小学校の教科体育の内容を各運動領域の特性を踏まえた指導法を中心に「模擬授業」を実施しながら授業を展開する。受講生が教師役となり、模擬授業を担当するが、教師役になった受講生には担当時間の前に事前指導を行う。授業はクラスに分れ、それぞれ2種目を受講する。

小学校体育の運動領域のうち、器械運動、陸上運動、ボール運動、表現運動を取り扱い、春学期（体育科技能実習Ⅰ）・秋学期（体育科技能実習Ⅱ）それぞれ2領域を開設しており、受講生には年間を通して4領域を履修することを勧めている。

① 授業の全体計画

表1は、本講座の授業の全体計画である。授業の最初にオリエンテーションを設

け、クラス分けと授業の進め方、指導案の作成等について説明する。

受講生をAグループ（陸上運動）とBグループ（表現運動）の2グループに分け、7回の模擬授業を実施後、グループの運動領域を交替する。毎時間3名の学生が教師役となり、学生全員が1回は教師役を行う形式で行なう。

表1 模擬授業の全体計画

回数	学習内容・活動	Aグループの模擬授業	Bグループの模擬授業
1	オリエンテーション（授業の進め方、担当分担、指導計画の作成の仕方等）		
2	模擬授業①	「運動遊び」の指導	表現運動の指導
3	模擬授業②	「基本の運動」の指導	表現運動の指導
4	模擬授業③	「短距離走」の指導	表現運動の指導
5	模擬授業④（本時）	「ハードル走」の指導	表現運動の指導
6	模擬授業⑤	「走り幅跳び」の指導	表現運動の指導
7	模擬授業⑥	「リレー」の指導	表現運動の指導
8	模擬授業⑦	「走り高跳び」の指導	表現運動の指導
9～15	グループを交替して上記の模擬授業を実施		

② 模擬授業の進め方

ア オリエンテーション

- ・ 単元計画、指導案（様式を提示）に必要な事項
- ・ 授業時間の1コマの流れ
- ・ 授業担当者の決定

イ 指導案の作成及び事前指導

ウ 模擬授業

1コマで、3名の模擬授業を行う。授業時間は25分とし、指導案は45分で作成する。教師役以外の学生全員が児童役になり、各授業後に表2の「模擬授業評価表」を記入し、授業について協議する。

[授業の流れ]

- ・ 用具等の準備
- ・ 模擬授業担当による本時の説明

- ・準備運動（1 時間目を担当する者が行う）
- ・模擬授業
- ・授業者自評及び全員でのディスカッション
- ・教員からの指導及び講評

3. 本時のねらい

本時は、陸上運動の 4 回目の授業で「ハードル走」を取り上げた。

「ハードル走」は、ハードリング技術とハードル間のインターバル・リズム走が中心的な学習内容となるが、走りながらハードルをまたぎ越すという技術は難しいだけでなく、ハードルに対する恐怖感を抱く児童は多い。したがって、指導者の授業の展開の仕方が学習内容の習得を大きく左右する。

表 2 模擬授業評価表

授業日 月 日 授業者

学籍番号

氏名

下の質問について、あてあまるものに○を付けてください。

次元	項目	質問事項	評価
成果	感動の体験	深く心に残ることや感動することがありましたか	3・2・1
	技能の伸び	今までできなかったこと（運動や作戦）ができるようになりましたか	
	新しい発見	「あっ、わかった」と思ったことがありましたか	
意欲・ 関心	精一杯の運動	精一杯、全力を尽くして運動することができましたか	
	楽しさの体験	楽しかったですか	
学び方	自主的学習	自分から進んで学習することができましたか	
	めあて学習	自分のめあてに向かって何回も練習できましたか	
協力	助け合い学習	友だちと互いに教え合ったり助け合ったりできましたか	
	協力的学習	友だちと協力して仲良く学習できましたか	

3は「はい」、2は「どちらでもない」、1は「いいえ」

4. 特にみてほしかったところ

本時は、模擬授業を通して小学校体育科における授業実践のための基礎的な能力及び授業実践上の問題解決能力の育成とともに、体育科教育学の理論の理解をねらいとしている。これらは、受講生自らが計画・実施及び参加した模擬授業を振り返ることを通して、その達成を図るものであり、特に、以下のような授業実践上の問題解決能力の獲得が達成されているかどうかを評価していただきたいと考えた。

- ① 単元を構成する能力（単元構成能力）

- ② 教材を開発できる能力（教材開発能力）
- ③ 準備・片付け等の授業をマネジメントできる能力（マネジメント能力）
- ④ 授業中に起こる多様な事柄に適切に対処できる能力（臨床的実践能力）
- ⑤ 自らの授業を多様な視点から振り返ることのできる能力（反省的実践能力）

5. 授業について自評

計画では、グラウンドで実施する予定であったが、前日の雨でグラウンドコンディション不良のため、急遽、体育館での実施となった。学生には、実際の学校現場もそうであるように、さまざまな要因で計画通りに進められない場合があるので、必ずバックアッププランまで考えておくようオリエンテーション等で指導している。提出した指導案とは違う授業の進め方に、少々とまどいながらも授業担当の学生はそれぞれ創意工夫した模擬授業を展開してくれた。

模擬授業の終了後の検討会では、実際に授業案を作成して授業を担当した教師役の学生、学習者役として授業を受けた学生が、それぞれの役割から得た経験を振り返りながら、評価表に基づいて、その原因や今後の改善点を具体的に検討することを通して、授業を反省的に振り返る能力の育成が図られたものと考えている。

授業を展開するには、非常に多くのことを考えたり、決定することが求められる。例えば、計画立案の段階では、どのような指導の仕方で単元を展開するか、教材、学習形態、学習資料等はどうするか、という問題がある。また、施設・用具などの学習環境等についてもあらかじめ知っておかなければならない。授業がはじまれば、どの学習者を観察し、フィードバックを与えるか、安全面での配慮はもとより負傷などの突発的な問題への対応、計画と実際の授業のズレへの対処等、その場で即座に決定しなければならないことが多々ある。さらに、授業後には、授業計画の修正など、次の授業改善に向けた取り組みも必要である。

このような授業を実施するときに生じる多様な問題を解決できる能力は、自らの実践を振り返ることによって高めることができる。授業で生じる問題を見つめ、理解し、それに向き合うことを通して高めていくことができると考える。

来年、3年生は、改訂学習指導要領に基づいて、教育実習に臨むことになる。教育実習は大学の学習の集大成であり、どの学生にとっても大きな緊張を伴うものであるが、こうした模擬授業の体験から、今後の体育科教育に意欲的に取り組む学生の育成が重要であると認識している。来年度から、新カリキュラムにより、「運動技能実習」が「体育科教育Ⅱ」と名称を変更し必修授業となる。今後、一層の授業の充実改善を図り、学生の指導に当たりたい。

Ⅱ「基礎演習Ⅱ」（学校教育課程）

1. 実施要領

- ① 日 時 平成 20 年 12 月 3 日（水） 1 限
- ② 会 場 432 教室
- ③ 対 象 教育学部 2 年生（学部共通）

2. 授業の概要

「基礎演習Ⅱ」は、「基礎演習Ⅰ」で修得した主体的に学習・研究・発表を行うための基本的な手法の上に立って展開される授業である。より専門的な課題を自ら発見して調査・研究・実験・フィールドワーク等を行い、その結果を発表して討論することによって、実践的な知の技法を体得、する併せて、この探究の過程を通して将来教員になるための幅広い教養を身に付けることを目的として新カリキュラムで開設された授業である。

講座の開設に当っては、1 年生の秋学期にクラス選択オリエンテーションを実施し、授業担当者の授業内容を説明した上で、学生の希望を出させてクラス分けが行われる。本年度は、初めての実施ということもあって、担当者会議の開催からクラスの決定に至るまで、運営委員の先生、教務委員会の先生方の苦労も大変だったと思われる。第 1 希望で 83 名、うち自専修の学生が 29 名という希望者だったこともあり、人数の調整をお願いしたが、教授しやすい人数、専修に調整していただき、この場をお借りして感謝申し上げたい。

① 授業の全体計画

表 3 は、本講座の授業の全体計画である。

子どもの規範意識の低下やコミュニケーション能力が問題となり、そうした原因の一つに子どもの「遊び」の変化が指摘される中、本授業では、「子どもにとっての『遊び』の意味を考える」ことをメインテーマに、ミニ卒業論文の作成を通して、研究の進め方、考え方を身に付けることをねらいとした。

② 授業の進め方

子どもの「遊び」と関連して各自が研究テーマを設定し、参考文献の収集・紹介、研究方法や調査用紙の検討・作成、論理的な文章の書き方などを学び、中間発表などを経て、B4 版 1 枚に抄録形式でまとめ、提出することをゴールとした。オリエンテーションの際、過去の体育専修生の卒業論文抄録集を配布し、論文作成のイメージをもたせた。

授業の展開に当っては、30 名の学生をグループに分け、授業の課題に沿ってグループ内でのディスカッションを重視した。専修を超えたクラス編成であるため、

学生同士、本授業ではじめて顔を合わせる者やこれまで会話したことがない学生もみられた。そこで、授業の進行に沿って、グループ編成を2回行い、その都度、グループワークやピア・サポートプログラムを活用した活動を取り入れ、対人関係能力のトレーニングなども取り入れた。学生同士が協力し合える人間関係を構築し、「ともに学び、ともに成長」できるよう配慮した授業展開を心掛けた。

評価のために、各学生にクリアフェイルを配布し、感想文、評価表、研究に向けて収集した資料等を入れるよう指導し、ポートフォリオ形式で評価ができるようにした。

表3 「基礎演習Ⅱ」の授業計画

回	学習内容・活動	授業の課題
1	オリエンテーション	授業の進め方、授業計画を理解する。「ごちゃまぜビンゴ」
2	子どもの「遊び」を考える	子どもにとっての「遊び」の意味、問題点を考える。
3	論理的な文章を書く	論理的な文章の書き方を理解する。
4	「遊び」を知る・体験する	体育館で「遊び」をグループごとに紹介・体験する。
5	研究テーマを決定する	研究テーマ、目的、仮説、研究方法を検討する。
6	グループワーク	6人×5グループ、「バンガロー殺人事件」に挑戦する。
7	研究目的・方法の検討中間発表会	グループで発表し、代表者による発表会を行う。
8	文献を紹介する	各自の参考文献を紹介しあう。
9	調査用紙の作成	調査対象、項目、用語等について検討する。
⑩	中間発表会（本時）	グループで中間発表し、代表者による発表会を行う。
11	論文の書き方を学ぶ	研究論文の書き方について理解する。
12	発表会①	口頭発表を行う。
13	発表会②	抄録に基づく発表会を行う。
14	抄録提出	

3. 本時のねらい

本時は、前時までには各自の研究テーマ、研究方法に沿って調査用紙を作成したことを踏まえた中間発表会を実施する。

グループごとに、表4の「中間発表」評価表を用いて、各項目について各自の研究の進捗状況や研究の妥当性や結果の考察、授業最終日までに抄録完成を目指し、今後の見通しなどを確認することをねらいとした。

表4 中間発表 評価表

学籍番号

氏名

下の質問について、あてあまるものに○を付けてください。

発表者（ ） 研究テーマ（ ）		
項目	質問事項	評価
研究目的	研究目的が明確になっていますか。	3－2－1
研究方法	研究の方法は、目的に沿った研究法になっていますか。	3－2－1
参考文献	研究テーマの解決に必要な文献が集められていますか。	3－2－1
語句や定義	用語の統一や語句の定義が明確になっていますか。	3－2－1
客観的表現	調査結果が図表などで客観的に表現できるようになっていますか。	3－2－1
研究資料	文献以外の資料の妥当性が吟味されていますか。	3－2－1
調査用紙	質問事項はよく検討されていますか。	3－2－1
	回答者にとって難解な用語などが使われていませんか。	3－2－1
	選択肢は回答しやすく用意してありますか。	3－2－1
	集計表やコンピュータの利用も考慮して作成されていますか。	3－2－1
計画性	研究の見通しは適切ですか。	3－2－1
プレゼン	研究に関するプレゼンテーションはよくわかりましたか。	3－2－1

「はい」は3点、「どちらでもない」は2点、「いいえ」は1点

4. 特にみてほしかったところ

授業がスタートした頃は、挙手や意見発表も遠慮がちで、グループでの意見交換も消極的であった学生が、最近は分からないところがあると「先生！」と声をかけて、グループ内の討論も積極的に質問するなど授業中気軽に質問できる雰囲気が生まれてきた。テレビゲームの功罪も、ややもすると子どもの成長にとってマイナスの部分が論議されるが、テレビゲームの教育への活用といった視点での論議もあり、学生の柔軟でみずみずしい感性に感心することも多い。時には学生の日常生活の情報が耳に入り、学生のインフォーマルな部分に触れつつ、学生指導のきっかけとなることもある。

学習意欲を引き出し、学生が主体的に学ぶための授業づくり、授業方法の改善は、大きな課題であると考えている。自分なりには気をつけていても教員の一方的な「教える授業」になりがちであり、学生の学習意欲を高めることができているか不安を感じることもある。この解決法の一つとして、講義の中に体験的な学習を組み入れ

ること、体験し、実感することで「教える授業」から「学ぶ授業」への転換が可能となり、また、学生との対話や反応の把握も容易になると考えた。

授業中の学生の姿を通して、こうした授業の「しかけ」が学生の授業への興味を喚起し、学習意欲の向上につなげることができているのか、参観者にみてほしいと考えたところである。

5. 授業について自評

卒業論文は、学生にとってはいわば大学での勉学のしめくりであり、大仕事であるが、2年生にとっては、まだまだ先の他人事のようなものである。しかし、卒業年次に入ってから急にあわててやろうとしても、我々の学生時代よりもはるかに多忙である現在の学生には到底十分な研究は期待できない。毎年、体育専修生の論文指導を行なっているが、内容は高いレベルのあるのに、論文原稿は稚拙な点が目立つという傾向が散見されることも事実である。

鋭い観察眼、小さな現象の変化にも疑問を持つ探究心、あるいは科学的な思考や正確な文章表現などは、急に身に付けようと思ってもできないものである。卒業論文作成に向けて、授業を通してこうした姿勢を養うとともに、興味を喚起し、学習意欲を高める「基礎演習Ⅱ」が担う役割は大きなものがあると再認識した。

授業のねらいを達成するために、どのような授業を計画し、展開することが効果的であるか、授業公開の実施は、担当する授業をあらためて見直すよい刺激となり、授業への動機付けとなった

大学における授業を担当して感じていることは、学生の学習意欲の低下と学生間の能力差である。学習意欲を引き出し、学生が主体的に学ぶための授業づくり、授業方法の改善は、大きな課題であると考えている。自分なりには気をつけていても教員の一方的な「教える授業」になりがちであり、学生の学習意欲を高めることができているか不安を感じることもある。この解決法の一つとして、講義の中に体験的な学習を組み入れること、体験し、実感することで「教える授業」から「学ぶ授業」への転換が可能となり、また、学生との対話や反応の把握も容易になると考えている。

今後さらに、教育効果を高めるためには、「基礎演習Ⅱ」の授業担当者同士の実質的な連携も必要であり、緊密な情報交換のもとに、互いの授業の中で生かされ、応用できる能力を養うことも重要な課題であると考えている。